

## 「こころの健康」

共同研究者	神戸大学発達科学部教授	河崎 佳子
助言者	社会福祉法人 滋賀県聴覚障害者福祉協会事務局長	中西久美子
司会者	大阪 ほくぶ作業所	植北 直子
	東京 たましろの郷	橋本 恵

### はじめに

今回、第2分科会第1分散会には、施設や地域で支援にかかわる31名が参加しました。レポート報告が4本。1日目に心理グループワークの取り組みのレポート、2日目に施設における3本の事例レポートの報告を行いました。2日間のそれぞれに対する質疑応答とアドバイスで、アセスメントの視点や受けとめる環境作りとは何かを少しずつ共通理解していきました。最後に参加者に一言ずつ意見をもらい締めくくりました。

### レポート報告の概要

#### (1)「難聴者グループワークの取り組み」

京都市聴覚言語障害センター  
中尾 恵弥子

聴覚障害者支援施設において、成人難聴者を対象に就労を目標として実施されているプログラムの中の「心理グループワーク」についての5年半の取り組み報告。

5年間に11名のメンバーが参加し、臨床心理士をファシリテーターとする受容的で自由な雰囲気の中で、家族や教育をめぐる自らの体験や思いを語り、仲間の経験や意見に学び、疑問や共感を抱きながら、自己受容、障害認識を深め、社会に出ていくパワーを充電していく過程が紹介されました。

難聴の参加者から「自分にも家族との葛藤がある」という意見がありました。

河崎氏からは、健聴者に気を使って生きてきた難聴者は多い。このグループは、頑張らなくていい自分、そのままいい自分の「居場所」として機能していると説明がありました。中西氏からは、難聴児への取り組み、働きかけがまだまだ足りない。福祉と教育の連携の必要。とアドバイスがありました。

#### (2)「心の動きを受け止める支援とは」

障害者支援施設 なかまの里  
水谷 信吉

グループホーム入所者の、未熟児で生まれ乳児院で育った20代Aさんの事例報告。

環境が変わるとストレスからか自傷行為や他害行為が見られる。「僕は大人」という本人の心の動きに合わせ受け答えし、安心できるように支援している。という報告がありました。

フロアからは、現在の周囲の反応や、家族関係や生育歴の質問が多く出ました。河崎氏からは、Aさんが「発達壁」を超えていくためには、本人に分かる方法で、彼自身の成育史を理解してもらう取り組みが必要である。自傷行為は、わかってもらえない怒り、どうしたらいいかわからない苦悩の表現。「自分は大人だ」と言っているAさんに、大人とは何かということを少しずつ気づいてもらえる支援が大切だろうと、アドバイスがありました。

(3)「精神疾患のある生活者の支援について」

特別養護老人ホーム  
いこいの村 梅の木寮  
高田郷子

特別養護老人ホーム入所者の統合失調症と診断され車いすでの生活をされている60代の利用者さんの事例報告。

精神病院を退院され希望でいこいの村に入所。入所当初から、大きな気持ちの波があり1日に何度も繰り返される。身体介護への抵抗があり手や足、大きな声を出される。表現は指文字だが早くて読み取れないと「もういい」と訴えなくなってきてしまった。家族から聞き取りや、疾患について勉強会を行なったが、どう感じ何を望んでおられるのかわからなくて悩んでいる。という報告でした。実際の支援の様子も映像で見せていただきました。

質問では、コミュニケーションの取り方や生き立ちなどが話題になりました。河崎氏からは、困難な問題が起こったときは、生育歴を振り返ることが大切。ジェノグラムを書き、ライフイベントを見直す。これを担当者が頭に入れておくことで、利用者への理解と対応の糸口が得られる。コミュニケーションが退行し、「どうせわかってもらえない」「誰ともうまくいかない」不満に圧倒されるAさんに対し、彼女のプライドを尊重した対応が大切だろうと、アドバイスがありました。

(4)「Aさんが持つ妄想性障害と認知症への支援について」

特別養護老人ホーム ななふく苑  
佐藤 達郎

特別養護老人ホーム入所者の、被害妄想と認知症がある70代入所者さんの事例報告。

10歳の時に発熱の後遺症で耳が聞こえなくなった。40代から被害妄想症状が現れた。昨年精神病院を退院し手話のできる施設へ行きたいと希望されななふく苑に入所。明るく人とのかわわりを好まれるが、一人になると落ち着かなくなる。「自分が怒られている」と不安定になることも多い。また、てんかん症状により車いすからの転倒滑落の危険性がある。わかりやすい環境作りを皆で考えて進めた。ろうの方から「病気につなげず見てほしい」と言われた。気持ちを受け止め、病気や障害があっても安心して暮らせるように支援していきたい。という報告でした。

質問への答えから、卓球が得意なAさんは力強いスマッシュが打てるが、ラリーは続かないというエピソードが出てきた。河崎氏から、ラリーができないのは協調性の乏しいAさんの課題を象徴するよう。Aさんの問題は、10歳で失聴して全く違う世界に入れられた孤独からきている。発作はヒステリー症状の可能性があり、かまってほしいと願うAさんの無意識的アピールと捉えられるなど、アセスメントの視点を教えていただきました。

中西氏からは、ろう者の立場から、ろう学校の実状や、体験から聞こえないことの大変さを教えていただきました。相談支援の現場にろう者の相談員をもっと増

やして欲しいと思います。

## まとめ

アセスメントには経験が必要。専門性をもつ心理士や精神科医につなげていく連携も大切です。コミュニケーション面での問題を生育歴や環境等を理解したうえでどのように援助していくのかがポイント。

当事者の悩み、苦しみを理解しながら受けとめる環境づくりを、心理面のいろいろな視点、いろいろな働きかけで考えていくことの重要性を学ぶ有意義な時間になりました。